
緋色の想い

茜 風緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の想い

【コード】

N3404F

【作者名】

茜 風緋

【あらすじ】

ハヤテ、ナギ、ヒナギクの三人がそれぞれの思いを胸に理沙の家の祭りで打ち明けます。

S t a r d u s t

ある夏の日のこと、白皇学院では今日も

大人顔負けの天才（一部を除く）の生徒たちが真面目に

授業を受けていた。

そんな中、上の空な生徒がいた。

彼女は、努力家の天才少女で才色兼備な生徒会長、桂ヒナギクであった。

「はあ、私はハヤテ君を嫌っていると思われているのかあ。」

そう、彼女は三千院家の執事綾崎ハヤテに恋心を寄せているのだ。

元から気にはしていたのだが、誕生日にあつたあの出来事以来、ずっと彼ばかりを

意識しているのである。

「どつしたら、いいんだろっ・・・」

年頃の女の子が好きな男子から、嫌っていると思われるれば、気にしないはずもなく。

こんな感じなので、上の空なのである。そう、こんな声でも・・・

「……ナ……ヒナ……ヒナッ!!」

……ビクウウウツ!!……

さすがに、ここまで大きな声だと、アメリカ人が

ヒップホップを聞いていても気づくだろう。

ヒナギクは、いきなり現実に戻され、心臓が破裂しそうだった。

「何よ、美希。吃驚するじゃない。」

いま、ヒナギクを呼んだのは彼女の親友である、花菱美希である。

政治家の娘で、白皇学院の小等部からいるのであった。

彼女いわく、小等部からいる生徒はすべからく頭が悪いらしい。

彼女も例外ではない。

「製作者、うるさいわよ。」

おっと、失礼。

「誰に話しかけているの？美希。」

「さあ。誰だろうな。」

「ところで、大きな声を出して何か用？」

「いや、ここ最近ヒナギクがぼーっすることが多いからどうしたのかと。寝不足か？」

「いや、そうじゃないけど。」

「なら、どうしたというのだ？」

「いいじゃない、別に美希には関係ないわよ。」

誤魔化そうとして言葉急いだヒナギクに対して、美希は何か引っかけりを覚えた。

いや、明らかにおかしいのであろう。

昔からの親友に対して関係ないと振り切るところに美希はひらめいた。

「じゃあ、好きな食べ物は何？」

「・・・カレーとハンバーグ」

「好きなスポーツは何？」

「・・・剣道。」

「1 + 1 = ？」

「・・・2」

「じゃあ、好きな人は？」

「・・・ハ、ハヤツ・・・@：；¥

「ちょ、ちょっと何聞いてるのよ!！」

「いやあ、ヒナにもいるのかなあとおもってな。

「ところで、いまハヤ「何でもないツ!！」

「いい?今すぐ忘れなさい。いいわね。」

「いや、しかし。」

「い・い・わ・ね・?」

「はい。」

美希はしぶしぶ頷ぐが、彼女の性格上忘れるわけもなく。

「あの時、明らかにハヤと言ったわよね。」

「つまりそこから推測されるのは。」

美希の思考回路は一人のシルエットを捕らえ始めたのであった。

一方、三千院家の執事綾崎ハヤテは、そのころ・・・

ハックション！！

くしゃみをしていた。

「誰か、僕の話でもしているのかな？」

ま、そんなに友達いないけど。」

の 太以上に彼にはドラ もんが必要なほど人生の迷子であった。

「何ですかソレ。僕がアレな感じじゃないですか！」

すみません、言い過ぎました。訂正します。

「ハ〜ヤ〜テ〜！！！」

「何ですか？お嬢様。」

「いま、誰と話していたのだ？」

「いや、大人の事情でちょっと・・・。」

そう、今彼が「お嬢様」と呼んだ13才の女の子が

彼のご主人様、三千院ナギである。

彼女は、三千院家じき頭首であり、莫大な固定資産による、世界でも

類を見ない超お嬢様なのだが、そのせいもあり、周りには

その遺産を狙うおとなばかりなので、ひきこもり気味なのだが

今日は珍しく学校へ来ていた。

「珍しいとはなんだ、珍しいとは。」

・・・失礼いたしました。

「お嬢様、どうなさいました？」

「いや、あのな学校とは何のためにあるのだろうかと思ってな、

その意味をハヤテに聞こうと思っていたのだ。」

「学生の本分は勉強ですよ。お嬢様。」

「しかし、家のほうが勉強は捗る。」

これは、うそではなく、彼女は、小さいときから最先端の

英才教育を受けていたため、大学の専門課程程度なら

難なく、こなせているので、学校にいる意味はほとんど無いのだが、

それでは、社会的にも、健康的にもよくないという、

ハヤテの方針なのだろう。

「では、ハヤテ、ひとつ聞くが3分の3は1という等式がある。

これは、本当に等式といえるか？」

「あの、イマイチ言っている意味が分からないのですが。」

「だから、簡単に説明するとだな、3分の3は、3分の1×3だ。

これを、さらに細かくすると、 $0.\overset{\cdot}{3}\overset{\cdot}{3}\overset{\cdot}{3}\dots\times 3$ は1だということか？」

「う、それは……」

「だろ？ だから結局勉強なんて無意味なものだ。

私に言わせれば、Gペンやカブラペンを手にとって、

漫画を描いていたほうが、よっぽどいいと思う。

漫画は私を裏切らない、そうだろう？ハヤテ。」

「そ、それは……」

「やはり言い返せないというのは私の言っていることが正しいということ……(省略)……」

「こゝらナギ、ハヤテ君を困らせちゃだめですよ。」

「なんだヒナギク、せっかくハヤテと二人きりのところを……」

「あつ、ヒナギクさんこんにちは。」

「こんにちは。ハヤテ君。」

「何をデレデレしているのだハヤテ!！」

「い、いやデレデレなどしていませんよッ!！ねえ、ヒナギクさん
!！」

「わ、私に言われても・・・。」

「なんだ、もう知らん!！しばらくついてくるな!！
スタスタと歩きだすナギ。

「ああ、待ってくださいお嬢様!！」

「ついてくるな!！」

「お嬢様あゝ。」

あきらめて、ゆっくりになり背中を目で追うハヤテ。

「あ、あのハヤテ君?」

「何ですか?ヒナギクさん?」

「いや、あのね、ハヤテ君って結構

何でもできるじゃない。

だから、少し手伝ってほしいことがあるんだけど。」

「ええ、わかりました。いいですよ。」

ヒナギクは内心、踊りだしたい気分だった。

好きな男子と二人きりの作業で喜ばない女子はいないだろう。

ハヤテは、そのことも、これから起こる未来のことも予期していなかった。

「ごめんなさいね、ハヤテ君、本当は

生徒会の仕事何だけど、みんな忙しくって。」

「いいんですよ。気にしないでください。

お嬢様のご機嫌もしばらくは直りそうも無いので・・・。」

そうして、ハヤテは生徒会の仕事の手伝いをする事になった。

「で、仕事の内容なんだけど、この書類があるでしょ？」

この書類に判子をを押してほしいのよ。

何といっても、小等部から高等部まであるものだから一人

では、ちょっと・・・」

「ええ、分かりました。ここに判子を押しさえいいんですね？

でも、大変ですね。いつもこんな仕事を

しているんでしょう？さすがヒナギクさん。

すごいですよねえ。」

「そ、そんなこと無いわよ。生徒会長としての責務だから。

でも、助かるわ。一人で、どうしようと思っていたところなの。

ありがとう。」

そうして、仕事を黙々とこなし、仕事が終わりがけ、ヒナギクは考えていた。

・・・今って、ハヤテ君と二人きりよね。・・・どうしよう、意識したらドキドキしてきちゃった。・・・

「・・・どうしました、ヒナギクさん？」

「ひあああっ！・・・きゅ、急に話しかけられたら吃驚するじゃない！」

「あの、すみません。ですが、大丈夫ですか、お疲れ気味では？」

「そんなこと無いわよ。平気。」

「……心配なんてされている暇は無いわ。せっかく

二人きりなんだからもっとガンガン攻めないと……

「ところで、ハ、ハヤテ君？前から聞きたかったんだけど、

ナギのことって、す、好き？」

「……はい？何を急に。」

「……まあ、好きですよ。当たり前じゃないですか。」

「僕はお嬢様の執事ですし、何より、僕の命の恩人ですから。」

「……そっぴね。」

「・・・え、え〜っと、も、もちろんです!。」

僕の大切な友人ですし。お嬢様の友人ですから。」

「・・・ああ、やっぱりハヤテ君は私の気持ちに気づいていないんだ。・・・」

そう、考えた矢先、思いもしない言葉がハヤテから発せられた。

「あ、あのヒナギクさんは、ぼ、僕のこと、好き・・・ですか？」

「・・・えっ？」

いきなりの質問にパニック状態で、頭が廻っていない。

だが、その頭をフル回転させてヒナギクは考えた。

「……ど、どうしよう。ハヤテ君からそんなことを聞いてくるなんて。」

ここで、自分の気持ちをすっかり持たないと！

これを、チャンスにしないと。……

「……わ、私は、ハヤテ君のことが、す、好「ヒナアアア！！」

お姉ちゃんの財布から天使がパトラッシュと間違えて、諭吉を持ってちやっただのよお〜。

だから、お金貸してえ〜。」

今入ってきたのは、桂 雪路である。

彼女はヒナギクの実の姉で、無類の酒好きである。

給料日の10日前には、酒に金が消えるのだ。

なので、こうして28にもなって10以上歳が離れている妹にお金を借りようとしているのだが、

今回だけはタイミングが悪すぎたようだ。

・ ・ ・ 30分後。

「いいから、もうでて行って!!」

やっと、終わったようである・・・

「ふんだ！ヒナのケチツ!!」

「うるさい!!」

そういつて雪路は、生徒会室から出て行った。

・ ・ ・ もう！お姉ちゃんの馬鹿。 せっかく、 せっかく・・・
・ ・ ・

「まったくもう。」

もう、ヒナギクは疲れ果てていた。

せっかくのチャンスがつぶされたのだから当然だ。

しかし、ハヤテはその答えが気になっていたようだ。

「で、どうなのでしょう。ひ、ヒナギクさん。」

・・・チャンス到来。

「・・・なんだか、疲れたから、もう勢いでいっちゃえばいいわよね。」

別に気持ちに気づいてもらえなくてもいい。

ただ、嫌ってはいないということだけしてもらえれば。・・・

「だ、だから！ 私はハヤテくんのが大好きなのッ!!」

・
・
・

さっきの言葉、とても幸せでした。

ヒナギクさん。僕も・・・大好きです。」

そういうと、ハヤテの決意が決まったようで、

瞳を閉じて、ヒナギクに近づいた。

それに気づいたヒナギクも自然と目を閉じた。

・・・放課後の生徒会室。

そこには、生徒会長の姿をした乙女と、一人の男。

二人の距離はもう、わずか3ミリ。

二人の心拍数は100ビートをはるか超えているだろう。

そこに、普段の二人はいない。

歯車はかみ合って、二人の気持ちは疎通していた。

二人とも、冷や汗が半端ではない。

「二人きり、何をしていたのかな？」

美希は、探るようにいった。

「な、なんでもないわよ。ハヤテ君に仕事を手伝ってもらってただけ。

ね、ねえ、ハヤテ君？」

「え、ええ、そうなんですよ。ヒナギクさんのお手伝いを・・・」

「ふうくん、でも、二人とも汗まみれよ？」

美希が鋭いツツコミをいれた。

「ほ、本当になんでもないのよ。」

二人ともいいわけするのに必死だった。

「まあ、ヒナがそういうなら、いいけども。」

あまり、納得は言っていない様子だが、あまり追求しようとはしなかった。

検討はついていたのだろう。

……まあ、生徒会室で二人きりであるなんて、

何も無いわけないわよね。……

美希は、含みを入れていった。

「ところで、明日、理沙の家の祭りがあって、みんなで行くが、お二人はどうする。」

ナギは、行くと言っているが。」

ハヤテは、主人である、ナギが行くのなら、行くのが当たり前だ。

「僕は、お嬢様がいくのであれば。ですが、ヒナギクさんはどうします?」

ヒナギクも当然ハヤテと同伴したかった。

なので、首を縦に振った。

「ええ、行くわ。」

「じゃあ、決定ね。明日は、2時半に時計塔に集合だけど、

ナギと、マリアさんは二人で先に会場まで行くそうだ。」

当然、これも美希が組んだことだ。

確実に何か企んでだろう。

何を仕組むかは、明日になってみないと分からないが、

この二人に何かが起こることは分かるだろう。

こうして、波乱の一日が終わって、3人は解散した。

ハヤテはナギと合流した。

一方、ヒナギクは・・・

「はああ。あと少しだったのに・・・」

疲労困憊していた。

うれしさと、がっかり感が複雑に折りこまれていた。

そして、美希は・・・

「ふっふっふ。明日は、二人の・・・」

何かを考え、怪しげな笑みを浮かべていた。

時刻は、2時半、此处は、白皇学院生徒会執行部の時計塔の下。

ハヤテ、ヒナギク、美希はすでに集合していた。

「では、今日の日程を伝えるから。」

こう仕切ったのが美希である。

「今日は、班行動になって、私たちと、もう一グループは、ナギ、マリアさん、理沙、泉よ。」

「あの、質問してもいいでしょうか。」

「どうしたんだ、ハヤ太君。」

「僕と、お嬢様は一緒じゃなくていいのでしょうか？」

「まあ、マリアさんがいるんだからいいんじゃない？」

納得したハヤテは頷いた。

「ねえ、美希？ 班行動っていったけどナギたちとは一日中別行動なの？」

「いや、今日は花火大会も理沙ん家でやるんだけど、そのときに集合するわ。」

まあ、ハヤ太君には悪いが、あそこ、相当広いから、ばったり会う可能性はかなり低いわ。」

これらは、美希に寄る作戦だった。

おそらくは、まだ何かたくらんでいるのだろう。

「じゃあ、行くわよ。」

そうして祭りへと3人は向かった。

一行は、会場に着いた。

「暑いわねえ。私のどカラカラだわ。」

そう言っつてヒナギクはうちわを仰いだ。

「本当に暑いですね。」

ハヤテも頷いた。

「何か飲み物でもないのかしら？」

そう言い、美希は周りを見渡す。

「おっ、カキ氷があるじゃないか。」

買いに行こう。

そっちの方向へ歩き出した、3人。

そのとき、ヒナギクが転びかけた。

「危ないっ!!」

ハヤテはとっさに反応してヒナギクを支えた……つもりであったが、

反射に近いものがあつたので余裕なく、体ごと支えてしまった。

つまり、ハヤテはヒナギクを抱きしめたのである。

「大丈夫ですか。ヒナギクさ……ん？」

異変に気づいた。

何かヒナギクの顔が紅い。

「あ、あのハヤテ君？もう、大丈夫だから……」

「す、すみません!! あの、そのこれは……」

「うん、分かってる。私が悪いの。だからありがとうね。」

そついうと恥ずかしながらも少しだけうれしそうにハヤテから

離れた。

……ふふ、いいものが見れたわ。やっぱりこの反応は……

美希は確信を得た。

二人が密かな恋心を抱いていることを。

「あ、あの、ではカキ氷を買いに行きましょう。」

落ち着きを戻したハヤテはそういつて歩きだし、カキ氷の屋台まで着いた。

「じゃあ、私はイチゴ味で。ヒナは？」

「私もイチゴかな。」

「では、僕はブルーハワイで。」

それぞれ注文した3人は、代金を払い店を離れた。

「やっぱり、祭りの定番よね、カキ氷って。」

ヒナギクが言った。

「そうですね。これを食べると夏って気がしますよね。」

涼しげな会話。

そこに、美希が、

「ハヤ太君、一口くれ。あ〜ん」

美希が口を開けた。

「え、え〜つと・・・」

戸惑いながら、ハヤテはカキ氷を美希の口に運んだ。

「うむ、なかなかうまいな。」

美希は一手考えていた。

そして、こういう。

「ハヤ太君、ヒナにも上げたらどうだ？」

私だけでは不公平だ。」

そういつて、ヒナギクの方向を向いた。

「そ、そんなのいいわよ！！」

ヒナギクが照れくさそうに言う。

「しかしな。私だけもらうと何か引っかけりがある。

なあ、ハヤ太君。」

「そうですね。さあ、どうぞヒナギクさん。」

ハヤテはヒナギクにカキ氷を渡そうとする。

そこに美希は言う。

「おや、ハヤ太君、私には食べさせてくれて

ヒナにはしてやらないのか？」

困らせるように言う。

「ほら、ヒナも口を開けたら？」

食べさせてくれるそうよ？ハヤ太君が。」

そういうとハヤテとヒナギクは少し頬を紅く染め

美希の言つとおりにせざる得なかった。

「で、では、ヒナギクさんどうぞ・・・」

ハヤテはゆっくり手を動かした。

それに応じてヒナギクも口を開けた。

「あ、アーン・・・」

冷たいシズクが舌に落ちた。

「お、おいしい・・・」

そついいながら一層頬を染めていた。

食べ終わった3人はお化け屋敷へ向かうことにした。

「そろそろね。」

・・・そうだ、私、これから理沙の手伝いがあるんだった。

悪いが二人で入ってくれないか？」

美希は、そういつて席をはずした。

「ちよっ、美希！ 待ってよ。」

ヒナギクの声は観衆によつてかき消された。

「もう。あの娘は。」

ため息交じりでそういった。

「では、二人で入りましょうか。」

ハヤテが言った。

「そうね、せつかく並んだことだし。」

二人は、納得して二人で入ることにした。

この後起こることも知らずに・・・

.....ヒュ~~~~~

ここは、お化け屋敷。

夏場、祭りの定番スポットである。

その中に若い男女が2人、入り始めた。

「あ、案外怖そうなものなのね。」

そういったのはヒナギクである。

「ははは、平気ですよ。」

不安そうなヒナギクを宥める様にいった。

「大丈夫ですって、いざとなったら僕もいますから。」

最初に言ったでしょう？いつでも守るって。」

その言葉にドキっとしたヒナギク。

しかしそこは鈍いハヤテ。

「でも、ヒナギクさんが僕に守られるなんてありえませんがねえ。」

「

ヒナギクは少しムカつとする。

「何よ。私がそんなに女の子らしくないって言いたいのか？」
慌てるハヤテ。

「い、いえ、そうではなくて・・・いつもなんでもできて、僕なんかヒナギクさんを

助けるなんて・・・

でも、やっぱり困っているときはいつでもいききたいな、と。」

なんとか言い訳をするハヤテ。

「まあ、どっちなのよ。でも、助けてくれるのよね。」

「・・・ありがとう。・・・」

なにかをヒナギクはボソツといった。

「えっ？なんですかヒナギクさん。」

「なんでもない。さあ、行きましょう。」

「そうですね。」

ハヤテは手を差し出しヒナギクの手に触れた。

「・・・あっ・・・」

ごく自然に触れた手にヒナギクは思わず息を漏らしてしまっ。

「すみません。ですが、暗いのでこの方がよいかと・・・」

嫌でしたらやめますが・・・」

そういつてヒナギクの瞳をみた。

「・・・離しちゃ嫌。」

「えっ？」

思いがけない言葉に少し驚くハヤテ。

そして

「分かりました。屋敷の中では僕が誘導するので手を離さないでください。」

そういつと、手をしっかりと握って進みはじめる。

しかし、その行動はしっかりと見られていた。

もちろんこの二人に。

「なあ、見ただろ？」

美希である。

「何なんだ、あのヒナの女の子らしさ、

そしてハヤ太君の男らしさ。

まるで恋人同士ではないか。」

理沙である。

彼女の説明は後々させてもらう。

「なんで私だけあとまわしなのだ？製作者。」

すみません、理沙さん。

時間の都合上です。

本当にすみません。

「で、なんであんな状況なんだ？

おいしい映像ではあるが。」

「さあな。ただ、この後が楽しみだわ。ふっふっふ」

美希が含みながら笑った・・・

うわぁっ!!!!

お化けがそう叫んだ。

「きゃあっ〜っ!」

ヒナギクが反応した。

「び、吃驚したあ。」

「大丈夫ですか？ヒナギクさん。なんだったら目をつぶってもいいですよ？」

やさしくハヤテがいったが、

「何よそれ。私が、こ、怖がっているとでも思ってるの?」

ツンとするヒナギク。

「……まさか、ここで、ハイとはいえないしなあ。……」

「いえ、全然。」

「な、ならいいのよ。」

そこに

ぐわああっっっ!……!……!

またもお化けである。

「いやあああ……!!」

思わずハヤテに抱きつく。

「ひ、ヒナギクさん。大丈夫ですよ。

それに、あの、ヒナギクさん。少し

落ち着いてほしいのですが。」

今の状態に気づく。

「あの、そろそろ離れていただきたいのですが。

歩けないので……」

「いや。離れたくない。離れたら

また出てくるもの。」

そういつて離れようとしなないヒナギク。

「分かりました。では、僕が抱えて行くので

目と耳を閉じてください。」

落ち着かせるように言った。

「よいしょっど。」

「ちよ、ちよっと!!!!」

恥ずかしながらもうれしそうである。

「じゃあ、絶対に守ってよね。」

「はい。」

進みだしたハヤテたちに忍び寄る影があった。

美希と理沙である。

「よし、じゃあ撮るぞ。」

「ああ。」

……ジーンツ……

カメラが廻り始めた。

ふたりは、このトピックスを撮っていた。

「ふふふ、二人ともラブラブじゃないか。」

「しかし、ヒナがハヤ太くんをなあ。」

「まあ、予兆はあったがな。」

あとで、私が聞きだしてみる。」

そういつて、二人を追いかけた。

「ね、ねえ、ハヤテ君？後どれくらい？」

「そうですねえ。だいぶ歩いたのであと少しだと思いますよ。」
「
そういつていると光が見えてきた。」

「あっ、出口が見えてきましたよ。」

「そろそろいいでしょう。」

降りそうとするとヒナギクが

「嫌。このままがいい。」

と甘えるように言った。

「……そうですね。ではしばらくこのままです。」

そのシーンもしっかりとカメラは納めていた。

そうとも知らず二人はお化け屋敷をでた。

「さあ、外につきましたよ。」

「うん、ハヤテ君・・・ありがとう。」

「いえ、お役に立てて光栄です。」

二人はまた、手をつないで歩き出した。

今度は照れくささもなく、恋人のように指を絡め。

「近くに静かな川があるんだけど、少し付き合ってくれるかしら。」

「ええ。かまいませんよ。」

そういつて、二人は川に向かった。

日も暮れてきたころ、涼しげに川が

流れる音を聞きながら、ヒナギクとハヤテは、歩いていく。

「やっぱり、いつ来ても静かよねえ。」

「ヒナギクさんは、ここに何度も着ているのですか？」

「ええ、小さいときから。最初に教えてくれたのは美希なの。」

「へえ。でも、本当に静かですね。向こうでお祭りがやっているなんて、ここにいたら

気づきませんね。」

「そうですね。ああいう賑やかなのも嫌いではないんですけど、

やっぱり静かなほうが私は好きかな。」

そういつて、ヒナギクは髪に手を当てた。

「風が気持ちいいわね。ね、ハヤテ君。」

にっこりとハヤテを見た。

さすがにこの笑顔にハヤテもクラリとする。

「……ひ、ヒナギクさん、とても綺麗だ。どうしよう、まともに顔が見れない……」

「て……てくん……ハヤテ君ってば……！ どうしたのボーッとっ。」

思わず見とれていたハヤテだが、本人になかなかそうは言えないものである。

「い、いえ、少し考え事を・・・」

「何か、悩み事？ 相談に乗るわよ？」

いつも以上に優しいヒナギク。

「何よ、それ。 私が普段あまり優しくなくても言いたい訳？ 製作者さん。」

いえ、滅相もございません。 貴方はとても優しい方だと・・・

「なら、いいのよ。」

「で、何の話だっけ？・・・そうそう、悩み事って？」

「いえ、たいした事では。」

「そう、ならいいんだけど。」

そっぴいなながら、歩きつづける二人。

しばらく歩くとある場所に着いた。

「久しぶりねえ。ここに来るのも。」

そういつて、周りを見渡すヒナギク。

「何か、ここにあるのでしょうか。ヒナギクさん。」

川と草木、そして、小さなベンチがちゃんとひとつ。

それを懐かしそうに見ているヒナギク。

「ええ。本当に懐かしいわ。そのベンチに座りましょ。」

ほとんど、隙間のできないくらい小さなものだ。

「……ここはね、私の本当のお母さんがよく連れて来てくれた場所なの。」

「って言うても5歳の時のことだから少ししか覚えていないんだけど。」

「どこか寂しげな面影を浮かべ話すヒナギク。」

「それでね、お母さんはいつも私に花の髪飾りを作ってくれてね。」

「綺麗な素敵な髪飾りだったわ。うれしくて、うれしくて。」

「何度も眺めては付けて、眺めては付けていたわ。」

「……でも、或る日、お母さんとお父さんは、と雪路お姉ちゃんに借金を押し付けてどこに逃げちゃったの。」

「」

そういつていたヒナギクの頬からは涙が零れていた。

「ヒナギクさん。あの・・・」

ヒナギクは、はっとしていた。

「ご、ごめんなさい。変な話して・・・

驚いたでしょ。」

涙を拭くヒナギク。

「あんまり、気にしないでね、ハヤテ君。

昔の話だから。」

無理に笑うヒナギクにハヤテは・・・

「ヒナギクさん、無理をせずに。

自我^{エゴ}を抑制するのも大切ですが、

泣きたいときは、泣くのが一番です。

僕のでよろしければ、胸をお貸しします。」

優しく、暖かくいわれた言葉にヒナギクは心に隠していたものが

思い切り感情となってハヤテの胸に弾けた。

「うわああああああん。　ねえ、どうして？　どうしてなのっっ！！」

なんで、いなくなっちゃったのよ！！

ねえ、教えてよ、誰かぁ・・・」

ヒナギクの心の傷が一気に表にされけ出された。

「ヒナギクさん・・・」

こうなることを承知で言った言葉なので、何を言えばいいのか

普通の人なら迷うはずだが、同じような経験があるハヤテは

一度、ヒナギクにこう告げたことがある。

「人から見るとずいぶん不幸に見えるかもしれませんが、

心に深い傷もあるのかもしれない。

でも・・・今いる場所こゝは・・・

それほど悪くないでしょう。」「と。

その言葉で、少しは気持ちが和らいでいたヒナギクだが、思い出の場所に

きて、過去の話をして、より深く思い出してしまったのだろう。

大好きな母のことを・・・

そんなヒナギクにこんな言葉をハヤテは言った。

「ヒナギクさん・・・大丈夫です。

僕たちは、ここにいますよ。

みんな、みんなです・・・

だって、みなさん、ヒナギクさんのことが大好きなんですよ。」「

その言葉は、今のヒナギクにとって、一番大切に、暖かいことばだった。

それ故に、ヒナギクは増して泣き出してしまった・・・

その後、落ち着きを戻したヒナギクは、静かに口を開いた。

「ごめんね。こんなに泣いちゃって。

でもね、ありがとう・・・ハヤテ君。

・・・私ね、怖かったの。他人を好きになれば、好きになるほど

また、どこかに行っちゃうんじゃないかって・・・

でもね、今ハヤテ君は、僕はここにいるって言うてくれた。

だから、すごく安心しちゃって。」

ヒナギクの顔には笑顔が零れていた。

「それでね、思ったの。恐れていけないって。

大切なことは、未来みらいじゃなく現在いまを見ることだってことを。

昔ね、お母さんがこんな話をしてくれたの。

好きな人といるときを大切にしていって、その人の幸せを願いなさいって。

そうすれば、貴方自身も幸せになれるからって。

だからね、わ、私、今こうしてハヤテ君と二人きりでいられる時間を大切にしたいと思ってる。」

顔を真っ赤に染めてヒナギクは言った。

「ヒナギクさん。

・・・ありがとうございます。

そんな風に言うてもらえたのは久しぶりです・・・

・・・僕も昔、すごく大切な人がいて、その人は僕に色んなことを教えてくれたんです。

男ならもつと強くなれとか、女の子と付き合いたいなら一生の甲斐性を持つてとか、本当にいっぱい。

ですが、その人は僕が言った一言で僕の目の前から消えてしまいました。

ですから、ヒナギクさんの気持ちはよくわかります。

だからこそ、僕もこうしてられる時間を大切にしたいです。」

そういうと、まぶしい夕日に覆われてハヤテはそっとヒナギクをだきしめた。

「ハヤテ君・・・」

高まる鼓動の中、ひととき眩しい光が二人を別世界へと誘う。

・・・しばらくそうした後、ハヤテが

「さあ、ヒナギクさん、そろそろ花火の時間です。

戻りましょう。」

そういつて、ヒナギクの手を取り歩き出そうとしたが、ヒナギクは動かない。

「あの、ヒナギクさん？」

ハヤテが振り返った瞬間ヒナギクは、ハヤテの唇に

彼女の唇を重ねた。

.....チュツ.....

やわらかい感触が唇に残る。

「あ、あ、あ。ひひ、ヒナギク・・・さん？」

「・・・口止め料。」

ぼつりと言った。

「へ？」

いきなりのことで頭が回転していないハヤテ。

「だから、口止め料よ。ふふ。」

私があんな風に泣いたなんていつたら、

許さないんだから。もしも、誰かに言ったりしたら私のお嫁さんになってもらうわよ。」

冗談を交え笑う彼女は世界で一番可愛かった。

おそらく、誰もが口をそろえるだろう。

「さあ、戻ろう！ハヤテ君。みんなが待ってるわよ。」

そういつて、ハヤテの手を引っ張るヒナギク。

「ああ、待ってください！ヒナギクさん。」

「早く、早くう。」

そんな幸せな時間は夕日を遮って地平線焼き尽くすのだろう。

そして、二人はみんなの場所へと向かった。

日も落ちて、少し紫がかった空に雲が広がっていた。

この広大な神社も夜になるにつれて段段と活気が出てきた。

「いやあ、まさかヒナがね・・・」

「あんな大胆なことをするとは。」

美希と理沙だ。

この二人はなんと、前回のあれを目撃していたという。

「カメラに保存しちゃったけど、これは、封印すべきよね。」

「だろうな。」

お化け屋敷を出た後、なおも尾行を行っていた二人。

最後の最後までカメラを回しつづけた二人は、

衝撃のシーンをカメラまでも取り込んでいた。

「とにかく、ナギにばれたらさすがに不味いだろう。」

二人が顔を合わせて言うと、後ろから、

「ほほう、何が不味いのだ。」

一人の女の子とメイド服を美（少）女といつもニコニコしているシンテールの女の子が

現れた。

ナギとマリアと泉である。

「だから何って・・・」

うわあああ！！

どこから現れたのよ。」

美希が珍しくびっくりした様子だった。

「い、いや、なんでもないんだ。」

理沙が弁解を図ろうとする。

しかし、そこは頭の切れるナギ。

「何か私にばれてはいけないようなことでも会ったのか？」

っていうか、何で、美希がここにいるのだ？」

「ホントだ、なんでここにいるの？美希ちゃん。」

泉は聞いた。

「いや、な。理沙の手伝いがあったのだがそのままずっといっしょにいて。」

な、理沙。」

言い訳をしようと必死だ。

「ああ、そうなんだ。少し、神社の祭りの手伝いを、な。」
冷や汗交じりである。

「では、その手にもっているカメラはなんだ。
ずっと回っているぞ。」

的確な質問をされた。

「こ、これは・・・」

逃げるぞっ!!」

「お、おうっ!!」

二人は逃亡した。

「待つてよ!美希ちゃん、理沙ちゃん。」

泉が二人を追いかけた。

「まったく、何なのだ。」

私に知られたくないことでもあるのか?

・・・待つてよ。

今、美希がいたよな。

ってことは、今ハヤテは！」

ナギは気づいた。

この班行動でハヤテは美希とヒナギクと一緒にだったことを。

そして、今ここに美希がいるということは、

ヒナギクとハヤテは二人きりだということ。

「マリア。ハヤテは、私以外の女になびいたりしないよな。な？」

マリアは返答に困った。

「そうですね・・・きっとハヤテ君は大丈夫ですよ。

健全ですから。二人同士になったからといって何かするような

人じゃないと思いますよ。」

なんとか、逃げたマリア。

そして

・

・

「ふう。何とか逃げ切ったみたいね。」

美希は汗まみれだ。

「そうみたいだな。」

理沙は息切れしている。

「そうみたいだねえ。」

泉は、平然と言った。

「しかし、危ないところだったわ。」

あれがばれると、ハヤ太君もクビになりかねないからな。」

「ねえ、ねえ、それって何なの？」

泉が聞いた。

「これを見ればわかる。」

理沙がカメラを回した。

……ジーーーーッ……

終了。

「な、なんだってえ〜っ!!!」

泉が絶叫した。

「何これ。不味いよお〜。」

ナギちゃんにばれればハヤ太君クビだし、

ヒナちゃんに見つかれば・・・

とにかく、どうにか処分しないと!」

「ああ、そうだな。そこのごみ箱にでも捨てよう。」

あそこなら、みんなゴミを捨てるから問題なく捨てられるだろう。」

そういつて、ゴミ箱にテープを捨てた。

「ふう。これで一安心。大丈夫だろう。」

理沙が安堵した。

しかし、3人が過ぎ去った後ある人物が興味本位でゴミ箱のテープを興味本位で拾った。

「なんだこりゃ。何が入ってるんだらうな。」

東宮の坊ちゃんである。

「なあ、野々原、もう帰ろつよ。」

「何を言ってるんですか。まだ、金魚を一匹も釣れてないじゃないですか。」

「別にもういいよ。」

「あきらめるんですか？私は、そんな風に教えたおぼえはなああ
！！！」

野々原は教育的指導という愛のムチを振るつた。

「ご、ごめんよ、野々原。がんばる。がんばるからあ！！」

映像にできないほど愛のこもったムチでボコボコにされた東宮の坊
ちゃんは

金魚をその後、釣つたとか釣つてないとか。

・
・
・

「さあ、ハヤテ君。そろそろ集合場所よ。」

ヒナギクが言った。

「そうですね。」

ハヤテが言い返すと、

向こうの方から

「ハヤテー！ー！」

と愛らしい女の子の声がしてきた。

ナギである。

「お嬢様！ー！」

そういうところへ走ってきたナギをしっかりと

受け止めた。

「ハヤテ、一日中会えなくて、さびしくなかったか？」

ナギが聞いた。

「そうですね。やっぱりお嬢様といられないと

少し。

ですが、今日はヒナギクさんが一緒でしたから。」

ヒナギクが少し照れくさそうにしていた。

「なんだ、ヒナギク。」

今日はハヤテと二人つきりになったからといって、

ハヤテに手を出したりしなかっただろうな。」

ナギが痛いところを突いた。

「なななな、何もあるわけじゃない、。ねえ、ハヤテ君？」

「そ、そうですよ。決して、ヒナギクさんと接吻なんてしてないですよ。」

混乱の拳げ句、口から「あっ!」という声が漏れた。

「ほほう。ハヤテ。お前はそういうやつだったのか・・・」

気づいたときにはもう手遅れ。

ナギの怒りゲージはMAXをとくに超えていた。

「ハヤテの、ハヤテのバカアア!!!!」

そういつてナギはマリアの方へ走っていった。

「も、もう!!!ハヤテ君。」

だめじゃない。

せっかく気づかれていなかったのに!!!」

「すみません。ですが、混乱していて。

お嬢様に謝ってきます!!」

そう走り去るハヤテ。

ヒナギクはそれを心配そうに見送った。

・

・

・

「はあ、はあ、はあ。」

ナギが息を切らしていた。

マリアは人ごみにまぎれ、見当たらないのだ。

そこにハヤテが追いついた。

「・・・あの、お嬢様・・・」

「ついてくるなっ!!」

息を切らしながらナギはそういった。

「なんだ、なんだ、最初に私を好きだと言ったのは

ハヤテではないか。

それなのに……」

「い、いえ、違つんですよ。

別にヒナギクさんとは本当に何もなかつたんです。

ただ、ヒナギクさんが……」

言い訳をしようとするハヤテに

「言い訳なんか聞きたくない。

つまり、ハヤテは私よりヒナギクが好きなんだろう。

愛しているんだろうっ!!」

ナギが涙を見せた。

「……すみません、お嬢様。」

「謝つたりするな!!」

私は、私は、こんなにもハヤテが好きだというのに……」

ナギはそういった。

小さな女の子とはいえ自分の主人である人に

好きだと言われ、まったくその気持ちに気づけなかった自分と、うれしさがハヤテにこみ上げてきた。

「お、お、お嬢さまああ。」

ポロポロと泣き出し、ナギをぎゅっと抱きしめた。

「ハ、ハ、ハヤテ・・・」

ナギは驚き涙はとまり、抱きしめられ赤くなっている。

「お嬢様あ、ごめんなさい・・・」

僕、僕。」

そついうとハヤテは泣き崩れた。

今のハヤテはさっきのヒナギクと同じ状況にいる。

ナギの好きの一言に心を洗われ、

自分を拾ってくれたご主人に対しての

主従関係以上の気持ちが出たのだ。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

僕は、お嬢様の気持ちにも気づかず・・・」

そういつとさら強くぎゅっとした。

「ハヤテ・・・」

「ご、ごめん。」

私も怒りすぎた。

だから、泣くのはやめてくれ。

本当に好きだから・・・」

照れくさそうに本当の気持ちを伝えた。

「・・・お嬢様。」

本当にごめんなさい。」

そういつと、ハヤテは泣き止みこつ言った。

「自分からではないとはいえキスをしたことは事実です。」

それで、お嬢様を傷つけたのなら、何か責任をとらないと

いけないです。

お嬢様、何かその責任を僕に命令してください。

どんなことでも、この綾崎ハヤテ。お嬢様の命令に従います!」

ハヤテは自分のしたことの責任をとろうと精一杯になっていた。

「そんなこと、急に言われても・・・」

ナギは困っていた。

「さあ、お嬢様どんなことでも。」

ハヤテはいち早くその責任を果たそうと

一生懸命だった。

とそのときヒナギクが現れた。

「ハヤテ君、よかった。」

仲直りできたんだ。」

「いえ、ヒナギクさん。」

僕はまだ、自分の犯した罪を

償っていないので、それまでは仲直りなんて。」

ハヤテはヒナギクにそういった。

「じゃあ、ハヤテ、お前はどうかって罪を滅ぼすべきだと思っつ。」

ナギが聞いた。

「それは、お嬢さんの言うとおりにして・・・」

「それでは、今までどおりではないか。

そうではなく・・・

そうだ！ヒナギク、お前が決める。」

ナギはヒナギクにいうと、ヒナギクは

「ええ？私？私が命令って・・・

・・・そうね、私にも罪はあるわ。

そのぐらいのことはするわ。

・・・そうねえ、、、そうだ！

私がこんなことしたからいけないのよ。

こんなことが起こらないようにするには。

ハヤテ君。貴方、ナギと付き合いなさい。」

こうして夏の長い夜は幕を開けた。

「ハヤテくん、貴方、ナギと付き合いなさい。」

ヒナギクはそう命令した。

「ええ！僕がお嬢様と？」

・・そんなことできませんよ！

僕なんかじゃ不釣合いで・・・」

ハヤテは横に首をふった。

「何よ。これはナギからの命令よ。」

「従えないの？」

そう追求するヒナギク

「僕は全然よいのですが・・・お嬢様が。」

ナギのほうを向くハヤテ。

すると頬を真っ赤に染め、照れているナギがいた。

「あの、お嬢様。僕なんかでよろしいのでしょうか。」

ナギに問うハヤテ。

しかし、恥ずかしさのあまり口を開くことのできないナギ。

そこにヒナギクが

「何言ってるのよ。大体、ハヤテ君は少し鈍すぎるんじゃない？

いつもいつも。だから、必要以上に運が悪いのよ。」

確信を突くヒナギク。

「ハヤテ君？　なんで、ナギがハヤテ君を雇っていると思うのよ。

この際だからハッキリ言うわ。

貴方のことが好きだからじゃないの？

一緒に居たいからじゃないの？

ナギはそう思っているからどんなにケンカをしても、

ハヤテ君をクビにしないのよ。

わかる？

貴方が大切なのよ。

だから、お願い。

ハヤテ君・・・ナギと付き合っただけて。」

少し残念そうな顔をしているが

そこにはしっかりといつものヒナギクがいた。

本当にそうしてほしいのだろう。

自分のため、ナギのため、そして何よりハヤテのために

ヒナギクは二人を押し出した。

「ヒナギクさん。 ですが、ヒナギクさんは・・・」

「何言ってるのよ。 ハヤテ君。」

私は貴方を大好き。 だからこそ、貴方の周りの人も一緒に

幸せになってほしいのよ。」

ふっと微笑んだヒナギク。

まるで、あの日自分を拾ってくれた、小さくて、可愛い

少女と同じ顔をしていた。

最後にもう一度振り返って、

ハヤテの頬に手を当て

頑張つてと小さく呟きヒナギクは歩き出した。

「これで良かったのよね。」

誰にも聞こえないような声で、小さなしずくを

一粒落とし、拭いながら走っていった。

一方で少女はまだ横で赤面している。

ハヤテは何も考えずにただ、その少女が笑ってくれることを

期待して言った。

「お嬢さま・・・もしも、もしもこんな僕でよろしければ

お付き合いしていただけますか・・・。

僕は、気づかなかったんです。

そう、ヒナギクさんに言われるまで。

こんなにも大切な人が目の前にいることを。

僕はお嬢様を守りたいんです。」

正直な気持ちを伝えその答えを待つハヤテ。

数秒間の空白の後、ナギは小さな口を開いた。

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・。」

声は小さくともしつかりと可愛らしい声で

そう返事をした。

この瞬間に二人の想いが通じた。

あのクリスマスの夜、出会った二人の

歯車がやっとかみ合った。

「あ、の、ハヤテ？」

私は、私は、いつまでも、一緒に・・・

だから・・・ずっと守ってくれますか？」

恥じらいと躊躇いの表情で、聞いた。

ハヤテは、

「ええ、もちろんです。 ですが、執事としても

これからも頑張りたいのですが、駄目でしょうか。」

その質問にナギは問う。

「何故だ？そんなものが無くてももういいでは無いか。」

そう思っていたナギだが、

「やはり、お嬢様の使用人として、いるのがいいですし、

今僕がやめてしまうとマリアさんもクラウドさんも

大変でしょう。」

常に他人への思いやりを忘れないハヤテ。

だからこそ、他人の不幸まで背負ってしまうのだろう。

「ああ、そうだな。」

だったら、こういふのはどうだ。

借金は無しにする。

その代わりに私専属の執事をする。

つまり、執事を職にする。」

その提案にハヤテは、

「で、ですが、借金がなくなるというのは……」

戸惑うハヤテ。

「気にしないでくれ。別にあの程度の額なら、

問題は無いし、何よりハヤテには、ずっとそばにいてほしいし
幸せにもなってほしい。

借金などという鎖で繋がれていたんじゃない、嫌だからな。

それに、・・・恋人同士になった今、そんなもの
あるうが無かるうが関係ない。

ヒナギクが言ったとおり、ハヤテをクビにしなかったのは
確かにハヤテが好きだったからだ。

だから、借金を口実に雇っていたが、

もうそんなものはどうでもよい。」

真実を伝えるナギ。

その気持ちに応えるように、

ハヤテは、ぎゅっとナギの手を握り、

「では、皆さんの場所まで行きましようか。

お嬢様？」

「ああ、そうだな。」

互いの暖かさを感じ歩き出す二人であった。

秋が過ぎ、雪が東京にも見られ始めた頃、練馬区の右半分の敷地内にあるお屋敷で

暖かい暖炉の前で温々（ぬくぬく）しながら、ゲームをしている少女がいた。

彼女の名は三千院ナギ。

ナギは現在13歳である。

年齢上まだ中学生のはずなのだが、天才的な頭脳の持ち主のため飛び級をし、高校に通っている。

そして今日はその高校の登校日であるのだが・・・

「ハヤテえ!!」

かわいらしい声で誰かを呼んだ。

「はい、何でしょうか、お嬢様。」

彼の名は綾崎ハヤテ。

一年ほど前に両親の残した借金の片でヤクザに売られてしまったのだが

そのとき公園にいた少女を身代金目的で誘拐したのであるが

それがナギであった。

その後、二人は勘違いによって主従関係を結んだのであった。

「おい、いい加減にお嬢様は止してくれ。」

ナギはそういった。

主従関係において執事が主人に対して敬意を払い

お嬢様と呼ぶのは当然のことなのだがある理由において

ナギは想呼ばれるのが嫌だった。

二人は交際をしているのだ。

「は、はあ。ですが、では何と呼べば……」

困窮するハヤテ。

「ナギでよい。ナギと呼べ。いいな？」

「しかし、イキナリというのは何というか……。」

「別に良いではないか。ハヤテは私の彼氏のなのだぞ？」

「で、では、ナギ……お嬢様。」

「駄目だといってるではないか!!」

「す、すみません。」

「まあ、良い。ところで、ハヤテ。」

今私はこうして、モンスターパンダ、略してモンパンGをやっているわけだが

クーラードリンクを忘れた。助けてくれ。」

「なんですか、その同人みたいなゲームは。」

そんな事だと、この小説の作者みたいな危ない人に

なっちゃいますよ。」

「むっ、ソレは困る。」

……あの。それって、ひどくは無いですか？

危ない人というのは否定しませんが、何もたとえにしくなくても。

「どうせ、雑魚キャラだし。」

うっ、確かに。

・・・おっと、すみません。進行に戻します。

「ところで、お嬢様、いい加減学校へ行かないと。」

黙り込むナギ。

「お嬢様。無視しないでください。」

「-----シン。-----」

「何ですか、その懐かしい感じのいじめは。」

「いいではないか。あんな気の毒な獄にいてなんになるのだ。

気分が優れない。だから休む。」

完全に登校拒否である。

「お嬢様・・・ナギ、学校へ行きますよ!!--」

名前で呼んでみた。

「な、な、何だいきなり。恥ずかしいではないか!!--」

頬を赤らめるナギ。

「いえ、お嬢様が反応してくれないから。」

「だからって、いきなりは・・・」

「ゴホン、まあ、良い。では、学校へ行くか。」

「えっ！行くんですか？」

「なんだ、行きたくないのか？」

「いえいえ、お嬢様と一緒にいきたいです。」

ナギは上機嫌だった。

名前で呼んでもらったことがうれしかったらしく、

早々と着替えはじめた。

「さあ、朝食を食べにいこう。」

そういつて、ハヤテの手をとった。

「はい！..」

こうして長い一日が今日も始まった。

時は朝の8時30分。

白皇学院では、ちょうど朝のLHRの時間だった。

「では、何か質問のある方はいませんか？」

今、クラスの中で代表としてしゃべったのは、ヒナギクだった。

「それでは、明日の遠足の補足と備考を終了します。」

何かある場合は今日中に私のほうに質問してください。」

責任感のある彼女は、現在生徒会長とともに学級の代表をしている。

今の説明は、明日の三千院湖遠足のことである。

三千院湖も白皇学院も同じ区内にあり、小学生でも難なく

歩ける距離を歩強遠足として行うのだ。

この行事は今年から始まったもので理事長直々に

ナギの方へ要請があった。

ナギは少し迷ったが、許可をした。

本来ならば、拒否してもおかしくなかったのだが、そこを許可して
行事として開催されることになった。

許可した理由はただ一つ。

ハヤテと一緒に歩くことだ。

ソレを目的として、遠足に参加することになった。

「これで、ハヤテと一緒に・・・」

彼女はハヤテと交際中で、これを機に、もっと仲良くしようという作戦だった。

高尾山の際には別々の班だったので、今回は、班行動ではなく

個人で歩くことを条件に指定した。

「ふっふっふ、もっとラブラブに・・・」

ナギの口元が緩む。

「あの？お嬢様。」

ハヤテが一言声をかける。

「ふえ？な、何だ！！吃驚したではないか。」

顔が真っ赤になる。

「すみません。ですが、お嬢様、どうかなさいましたか？」

「なんでもない！気にするな。」

「さあ、移動教室だ。移動するぞ。」

「はい。お嬢様。」

荷物を持ち、ハヤテのほうから手をつなぐ。

「な、な、な……」

いきなりの事で、驚くナギ。

「駄目、でしょうか……」

積極的に攻めるハヤテ。

「いや、駄目じゃ……無い。」

「では。」

手を絡め、教室を移動する二人だった。

授業が終わり、自宅へと帰った二人。

三千院邸の扉を開けるとマリアが待っていた。

「ふたりとも、おかえりなさい。」

やさしい笑顔で二人を迎えた。

「ああ、ただいま。」

「ただいま戻りました。マリアさん。」

「どうでしたか、久しぶりの学校は。」

「うん？まあ、勉強なら問題なくできるから

特に面白くも無かったけど、明日の

要項とか言ってたな。」

「明日の遠足ですか？

ナギも参加するんですね。」

マリアがニコニコしながら聞いた。

「ああ、一応、な。

不本意ではあるが、自宅まで歩くということだし、

たまには良いかと。」

自分の考えを悟られないように

話そうとしていた。

しかし、相手は超有能な美人メイドさん。

隠し通せるわけも無いのだが

そこは、やさしいお姉さん。

心の中で、そっと応援していた。

……ふつぶ。ナギったら。ハヤテ君と歩けることが

楽しみ何でしょうね……

がんばってくださいね。……

マリアは笑顔になっていた。

その後、学校で在ったことをハヤテが

話した。そうしているうちに夕食の時間になった。

「では、夕食にしましょうか？」

「そうですね。では、準備をしましょう。」

食器のある台所へ向かった。

台所につき、二人は料理を始めた。

マリアが、カレー用のにんじんを切っていると、ハヤテが、口を開いた。

「マリアさん。明日の遠足でお嬢様、歩いてくれますかね。」

ちょっと、不安なんですよ。」

少し、半信半疑気味のハヤテに

マリアはこういった。

「大丈夫ですよ。ハヤテ君がいれば。

ハヤテ君はナギの彼なんでしょう？

なら、もっと信頼してあげてもいいと思いますよ。

それに、もしも明日うんとハヤテ君が

優しくしてあげたら自分から学校へ

行くようになるかもしれませんよ？」

ニコつと笑顔で、ハヤテに答えた。

「そう、ですね。僕が一番信頼してあげないと。

学校にも一緒に行きたいですし。

でもマリアさん。僕優しくするって何をしたら

いいんですか？」

「いいですか。そういうのは自分で

考えるものです。

・・・まあ、ヒントくらいはあげますよ。

ひとつは、今後一切お嬢様と呼ぶのは

無し。

これがまずは最良かと。

二つ目は、剃刀一枚は足りないほどくつつき

優しく接してあげるとよいかも

知れません。

三つ目は・・・

やっぱり自分で考えてください。」

「え〜っ、教えてくださいよお〜。」

「駄目です。」

何を言おうとしたのか、マリアは、

教えなかった。

・・・ここで、すべてを言ってしまったら

二人のためになりませんもの。 . . .

さすが完璧メイドさんである。

ひとつもふたつも先読みしていた。

そうこうしているうちに、夕食が出来上がっていた。

「では、そろそろ夕食も完成しますので、

ナギをよんでみてください。」

「はい、わかりました。」

台所を離れナギの部屋に足を伸ばした。

. . . うん。優しく、かぁ。

あんまりわからないけど、明日の遠足は

ずっと、お嬢様のそばにいてあげよう . . .

そう決めたハヤテはナギの元へと早歩きで

向かった。

「おはようございます。生徒会長の桂ヒナギクです。」

今日は、三千院湖遠足という本年度より開催される

行事です。怪我などに充分注意して楽しみましょう。」

注意を促したヒナギクであったが大抵の者はヒナギクに

見惚れているか、または話をしているかだった。

その中の一人に三千院家の時期頭首となる三千院ナギがいた。

「あゝあ。これから自宅まで歩くのかあ。非常に腰が重いな。」

ブツブツと文句を言っているようだが、その顔にはあまり不満が現れていない。

というよりも、ナギはこの行事を楽しみにしていた。

前話でもあったように、高尾山するときには一緒になれなかった分

ハヤテと一緒に歩けることを喜んでいた。

「なあ、ハヤテ。大体どの程度の時間でゴールできるのだ？」

ハヤテが答えた。

「うん。そうですねえ。お嬢様の足ならば5時間も

あれば着けるのではないかと思いますよ?」

「う、5時間だと・・・、そんなに歩いたら私は死んでしまつぞ。大丈夫なのか？この行事。」

ナギが驚くようにいった。

「大丈夫ですよ。基本的には、自宅に帰るようなものですから。」

まあ、何かあっても僕が付いてますから。」

「お、おう。そうか。それは助かる。」

実際には、それが目的で歩くわけなのだが、何しろ相手は

ルール無用の鈍感男。そんなことに気づくわけもないのだが。

「ではお嬢様、そろそろスタートですので最後にしっかりと

靴紐を結んでおきましょう。」

そういうとハヤテは、ナギの靴の紐を縛った。

「あ、ありがとう・・・ハヤテ。ではよろしくな。」

「はい。お嬢・・・ナギ。」

ニコッと名前を呼ぶと

ナギの顔がぱあっと明るくなった。

そして遠足の始まりの合図が出された。

「それでは皆さん、ゴールを目指してがんばってください。」

「では、行くぞ。ハヤテ！」

そういつとナギはスタスタ歩き始める。

それに寄り添うようにハヤテも歩いた。

「それにしても、学校から自宅まで遠足なんて

すごい話ですよねえ。」

理事長もよく三千院家に湖があるなんてわかりましたよねえ。」

「ああ。そのことなら、以前に家の敷地の図を渡したことがあるの
だが

それを見たんじゃないかと思う。」

私も知らないようなところもあつたがな。」

ナギが楽しそうに言う。

「そうなんですかあ。改めて凄い家ですね。」

そんなところで働けるなんて、僕は幸せ者ですね。」

ナギに笑顔で話しかけるハヤテ。

「う、うむ。しかし、ハヤテはこの一年間よくがんばってくれたよ。本当に感謝している。」

・・・ありがとう。」

「いえ、僕のほうこそありがとうございます。」

大好きですよ。お嬢様。」

ふたりはそういって手を組み始めた。

「この一年、色々あったな。」

ちょうど一年くらい前にお前がナンパされている私を助けて

くれたんだっただな。」。

「そうでしたね。あのとき、お嬢様に出会えたから

今、こうして一緒にいられますね。」

頑張るといいことがあるって言うのは本当ですね。」

そついうと二人とも懐かしそうにこの一年間のことを

話しながら歩いた。

一方そのころ、美希たちはずっと、

「あゝあ。疲れた。何か面白いことでもないかな？」

美希が言う。

「あれば、こんなにくったりしていないさ。」

理沙も言う。

「そつだよねえ。ただ歩くだけだもんねえ。」

なんだか、先が思いやられるよお。」

泉までもが言う。

ところで、理沙と泉の紹介が遅れました。

ここで、一度時間を頂き紹介としましょう。

理沙は、家が神社で巫女をやっているが伊澄のような

力は持っていない。ちなみに風紀委員をやっているが

美希同様、小等部から白皇学院にいたので、頭はよくない。

「くっくっく、余計なことを・・・」

ふっ、少し位勉強ができないほうがモテるんだよ。」

そ、そうですか・・・？

まあ、そのことは放って置いて、次に。

泉は、学級委員長をやっていて、実家がS NYなのである。

泉も小等部からいるため成績は思わしくない。

イジめられるのが好きという、若干変な娘が入っているが

そこが人気なのだとか・・・

「うえええん！そんなこと言うとグレちゃうよー！！」

それは、失礼いたしました。

では、閑話休題といたしましょう。

「おい。あそこに面白そうな二人がいるぞ。」

美希がなにかを嗅ぎつけた。

「何だ、何だ？何があるんだ？」

理沙が食いつく。

「おお！！あれは・・・ハヤ太君にナギじゃないか。

何やらラブラブな様子。これは、追いかけては。」

「え〜？そつとして置いてあげようよ〜。」

泉が止めた。

「何だ、退屈ではないのか。泉は。」

美希が問う。

「そうじゃないけど。この間だってヒナちゃんの
ことで大変だったでしょ。」

「そうか。ならよし。泉をいじくりまわして遊ぶか。理沙。」

「ああ、そうだな・・・ふっふっふ。」

二人が不敵な笑みで泉を凝視している。

「ちょ、ちょっと、や、だ、駄目え〜！」

何があったかは、想像にお任せいたします。

次いで、ヒナギクは、最後尾で生徒の監視および巡査をしていた。

基本的にお金持ち⇨体力が無いので、最後尾にいないと

置いて行ってしまう可能性があるのでこうして、ヒナギク

見回っているのだ。そんなことを言ってるうちに

既に置いてけぼりになっている生徒が若干一名。

「うう……野々原あ。助けてよ。」

東宮の坊ちゃんだ。

体力も根性も基本的に足りていないので

執事がついているべきなのだが、彼が今呼んだ彼の執事

野々原 楓は、イギリスに留学してしまったのだ。

故に現在彼一人で遠足に参加しているのだが、

友達がほとんどいないためハブられているのだ。

「はあ、はあ、はあ。後どれだけ歩けばいいんだ。」

もう、汗だくで、今にも泣き出しそうだ。

「グスン。もういいよ。こんな遠足なんか、遠足なんか……」

鼻の先がツンとなり、諦めかけていたところに、

「東宮くん。大丈夫？」

後ろからヒナギクが話しかけた。

「うわっ！か、桂さん！」

予想外の人に声をかけられ、驚いていた。

「どうしたの？はい。これで涙をふいて、ね？」

差し出されたハンカチに優しさを感じて

ブワっつと涙があふれた東宮くん。

「グス。うう。か、桂さん・・・」

ほとんど声になっていなかった。

「えっ、な、何。えっ、えっ!？」

私何か悪いことした？」

いきなり男子に泣き出されて同様しているヒナギク。

「あ、東宮君？本当に大丈夫？」

少し本気で心配していた。

「うぐ、えぐ・・・」

泣いてしまい、声になっていない、東宮君。

どうして泣いているか分からないヒナギク

だったが、彼にこう告げた。

「ね、ねえ。東宮君？もしも、あなたが良かったらで

いいんだけど、一緒に歩かない？」

思いがけない言葉に東宮君は

「えっ？い、一緒に歩いてくれるんですか？」

ほとんど聞き取れないような声だったが

ヒナギクにはしっかりと聞こえていた。

「ええ。東宮君が良いなら。私もこんな仕事をしているものだから、少しひとりで寂しかったのよ。」

そんな言葉を自分の好きな人から言われたなら、

喜ばない人はいないであろう。

なので、東宮君も喜んで「はい！」と答えた。

「じゃあ、涙を拭いて、早く行きましょう。はい。」

しゃがんでいた、彼にヒナギクは手をさし伸ばした。

立ち上がり、涙を拭き終わった東宮君とヒナギクは歩き始めた。

そしてハヤテとナギはというと・・・

「ハヤテえ。もう、疲れたよお。少し、休みたい。」

ナギの体力は、ほとんど、限界に来ていた。

「ははは。大丈夫ですか。お嬢様？」

二人称がお嬢様に戻っていた。さすがに一日ではまだ

恥ずかしいようだ。

「だ、大丈夫ではない。・・・私たちは先頭を歩いているんだよな。

だったら、大丈夫だな。ハヤテ、手を繋いでくれない、か？」

照れくさそうに臭そうに聞くナギにハヤテは

「勿論ですよ。何を言っても僕の大切なお嬢様ですから。」

ハヤテらしい笑顔を見せナギもクラリとなる。

そして、ハヤテはナギの指に自分の指を絡ませた。

「は、ハヤテ!？」 「なんですか?お嬢様?」

「い、いや、いきなりこの手の繋ぎ方と言うのは・・・」

少し抵抗があったようだ。しかしこのような繋ぎ方は

以前にもしている。なぜだろうと疑問符を頭に浮かべるハヤテだったが、

その手を見てやっとな理解した。

「っ！？お、お嬢様？す、すみません！」

彼の体はナギの体に剃刀一枚入らないほどに

ナギに密着していた。

「い、いや、別にいやではないというか……このままで良い。」

「そうですね、では。」

少し歩きづらく、恥ずかしそうにしているのだが、

内心はすごく喜んでいた。

――ハヤテ、いきなりこんなくっついてくるなんて……

「ハヤテ。ハヤテは、私のことが好きか？」

ナギがいきなり質問した。

「え？お嬢様のことですか。……そうですねえ、

ゴールができたときに教えてあげます。ふふ。」

いたずらをするような顔でハヤテは言った。

「えっつ、教えてくれよっ。」

ナギが甘えるように嘆いた。

「ふふふ。だめです」

歩きながら二人はこんなやりとりをしていた。

そしてしばらくの時間が経った。

「そろそろお昼ご飯の時間ですね。ここらで一度

お弁当の時間にしましょうか。」

緑の芝の上にハヤテはシートを引いた。

「うむ。是非そうしてくれ。」

足がクタクタのナギは休憩を待ち望んでいた。

ナギは腰を下ろすと、ふっ、と息を付いた。

「では、お嬢様、どうぞ。」

お弁当箱を開けて、ナギに箸を渡した。

「ん、ありがとうございます。では、いただきます。」

そういうと、マリア手作りのお弁当に箸を伸ばした。

……モグモグ……おいしそうにナギは箸を進ませた。

「ハヤテ、これおいしいな。」

「そうですね。さすが、マリアさんです。」

お昼の静かなひととき。ふたりは、碧の絨毯の上で

おいしそうにお弁当を食べていた。

マリアのお弁当を食べていると、ハヤテはマリアの言葉を思い出した。

……うんと優しくしてあげてくださいね。……

ハヤテは、そうだ！っと思いついたようでナギにあることをした。

「お嬢様、はい、アーン。」

自分の箸をナギの口元に運んだ。

「え？あの、ハヤテ！？い、いきなりは……」

……モグモグ、ゴクン……口に運ばれると、自然と口が開き

食べ物か喉を通った。

……これって……か、間接キスなんじゃ。……

そんなことを意識していると顔が赤くなった。

いくら頭が良いと言っても、まだ13歳。

とくにナギはこういうことに対しては純情なので、

うれしいながらも恥ずかしい様子である。

……恋人同士……しかし、ハヤテはいつもに増して大胆だ。

私ばかりがこんなことではいけない、

私からも積極的にいかななくては……

「じゃ、じゃあ、ハヤテ。アーン。」

「え？あ、はい。アーン。」

今度はハヤテがナギから受け取った。

「いやあ、お嬢様からこんなことをしていただけるなんて。

僕、とてもうれしいです。」

「ああ、喜んでくれたか。私もうれしいぞ。」

二人とも、こういう経験が少なくどうすればいいのかわからないので

とりあえず、思いつくことをした。

「は、ハヤテ。まだ人は来ないよな。」

で、ではすこし眠たいので膝枕をして欲しいのだが……。」

ナギからのお願いだった。

「ええ、いいですよ。はいどうぞ。」

そういうと、ハヤテは正座をしてそうできるような体制を取った。

そこにナギは頭をチョンと乗せた。

「ん。暖かくて気持ち良い。」

ナギがかわいらしい声で言った。

「そうですか。それは良かった。」

そういうと、ナギの頭をなでた。

他人に頭をなでられると気持ちのいいもので

「やっぱりお嬢様の髪はいつでも、きれいですね。……ってあれ？」

ナギはスヤスヤと愛らしい表情で寝息をしていた。

……ああ、僕はこの女性と付き合っているんだな。

子猫のようで、いつまでも守ってあげたい。……

そう心の中で呟くとハヤテは、ナギの額にそつとキスをした。

ナギは、寝言で「ハヤテ・・・大好き。」と小さく言った。

・・・お嬢様、僕も大好きですよ・・・

そうして二人だけの時間を過ごした。

しばらく時間が経過して、ナギは目を覚ました。

「う、うん。ここは？」

ナギは目を擦って、ぼやける視界を懸命に振り払った。

「あれ・・・ここはさっきの場所ではないな。」

そして意識がはっきりしてくると、何かの異変に気が付いた。

・・・あれ、何だろう、なんだか地面が動いているような・・・

そして、自分の足元を見た。すると、地面が自分の1メートルほどにある。

寝起きのためあまり状況を飲み込めていない。

「……………どういことだろう。……………そして、後ろを振り向くと

「あつ、お嬢様、おはようございます。」

ハヤテの顔があった。

「ふえ？あれ？どういこと……………っておい！」

自分の置かれている状況をやっと理解したようだ。

「ちょ、お前、これって。」

「ああ、さきほどは、お嬢様が寝てしまいましたので

このように、しました。」

ハヤテは、ナギをお嬢様だっこしていた。

ナギにとっては、うれしい反面多少の恥ずかしさがあるようだった。

しかし、降ろしてとは言わなかった。

「それにしも、お嬢様は体重が軽いですね。」

「ムツ、それは、私が小さいと言いたいのか？」

恥ずかしさを隠すためにわざと、怒ったふりをした。

「いえいえ、ですが、お嬢様は大きくても小さくても

かわいらしいですよ。」

ハヤテがそう宥めた。

「な、何をいきなり!?!」

かわいらしいと言う一言にナギは照れていた。

- - -
いきなり、かわいいだなんて・・・でも、うれしい。
- - -

好きな人間にかわいいと言われ嫌がる人間はいないであろう。

「・・・あ、ありがとう。」

ぼつりと言い、ハヤテもそれに、はい。と返事をした。

「では、お嬢様。もう少しでゴールなので降りてもらえますか。」

「ああ、わかった。よいしょ。」

ナギはハヤテの腕から降りた。

そして、また手を繋いで歩き出した。

少し歩くと、ゴールの旗が見え始めていた。

「おい！はやて、ゴールが見えてきたぞ！！」

ナギがいった。

「本当ですね！一番乗りですよ。」

ハヤテはそういうと、ナギの手を誘導した。

ゴールまでのラストスパート。二人はより強く手を握った。

ここまでの苦勞が走馬灯のように脳裏に浮かぶ・・・

・・・たった、一日ではあったけど、お嬢様が完走してくれて本当に良かった。・・・

・・・たった、一日だけど、こうしてハヤテと一緒に手を繋ぎ歩けて良かった。・・・

そして、二人はゴールをした。

「ふふふ、二人ともゴールおめでとう。」

理事長がゴールの前で待っていたのだ。

「まさか、君たちが一番に来るなんてな。」

「ええ、それは、もうお嬢様は頑張っていましたから。」

「え？そ、そんなことないぞ。」

照れるナギ。

「わ、私はハヤテと一緒にだったから・・・

できれば、もっと歩きたかったのだが。」

ナギの口から思いもよらない言葉が発せられた。

「・・・お嬢様。」

ハヤテはそんな言葉に呆気を取られていた。

「ふふふ。今度は、二人だけで歩こうな。な、ハヤテ。」

ナギは小さくハヤテにウィンクをした。

「はい。勿論です!!」

そう言うと、二人は近くにある湖の畔に向かった。

向かっている途中ナギは小さくハヤテに問いかけた。

「な、なあ。ハヤテ、さっき私が聞いた答えを教えてくださいませんか？」

「えっ？さっきって・・・ああ、ゴールしたらって言うやつですね。」

あの答えなら……。」

ハヤテの体がナギの体のほうにフツと傾いた。

そして、大きな執事の唇が小さな主人の唇に優しく触れた。

「お嬢様。……僕は、お嬢様を愛していますよ。」

ハヤテは、あどけない笑顔をナギに送った。

「え、あ、あ……。」

ハヤテの突然の行動にナギの体は熱くなっていた。

オーバーヒート状態のナギは思考が停止している。

「うう……ハヤテのバカ……。」

やっと出た言葉であった。

「すみません。お嬢様。もしかして、はじめて……だったのです
ようか。」

コクツつと少女が頷く。

「もう、ここまで来たんだな。」

こうなったら、ハヤテ。責任を取れよ。

私のファーストキスを奪ったんだからな。

責任は重大だぞ。」

そついいながらも、顔は満面の笑みが溢れていた。

「はい。お嬢様。ぼくが一生守って行きますよ。」

僕の、僕の大切な人ですから。」

ささやかな言葉だが、二人にとって、この言葉ほど

大きく、強い言葉は無いだろう。

二人は今ある世界を小さな歩みで進んだ。

それが、二人にとっての幸せなのだから。

「ハヤテ。いつまでも、一緒だからな！」

小さな少女は、大きな手をよりしっかりと握り

その温かみを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3404f/>

緋色の想い

2010年10月9日12時49分発行